童

2014 年 11 月 26 日.

志賀高原の山々が白く染まり、スキー場にナイターの光が灯る季節となりました。いよいよ、冬が近づいて来ましたね。大地の室内に入ると、薪ストーブの暖かさにほっとします。子ども達と一緒に準備した薪だけに、味わいながら大切に使いたいと思っています。

昨年は、11 月に大雪が降りましたが今年はまだその気配がなく、何とかこの連休にリンゴの収穫を終えることができました。サンクゼールの駐車場前のガレージで父親がりんごを売り始めて 15 年近くになりますが、常連のお客様が多く、「今年もじいちゃんに会えてうれしいね」とはるばる父親を訪ねてくる人の多さにびっくりします。そして、地方の名産品、特産品もお土産に頂き、このご縁が父母のリンゴ作りの原動力になっているようです。「来年も、りんごを買いに来るので、元気でいてね」と皆さんが帰っていきます。それが生きがいです。

そして、あちこちのりんご畑から、赤い実が消えて、だんだん周囲の景色がモノクロになっていくと、本格的な冬がやってきます。雑木林の小道はびっしりと落ち葉が踏み固められ、広葉樹はすっかり葉を落とし、取り残された渋柿だけが、見事にオレンジ色に輝く光景は、自分の小さい時から変わらない初冬の里山の景色です。

この本格的に雪が降る前の不安定な季節は、雪の暮らしを前に不安な事（雪寒さ対策）が多く、落ち着かない嫌なもので、早く白黒はっきりする季節となって覚悟を決めたいものです。子どもたちは、雪が待ち遠しい！！

88 歳と 83 歳の林檎

【ハードル２０ﾊﾟｰｾﾝﾄ上げて下さい】

末っ子の高校球児が 4 日間修学旅行に先日出かけました。その間、一足早く夫婦 2 人だけの老後！！を楽しむべく、エネルギッシュに過ごしました。朝早い弁当作り、夜のお迎え、高ｶﾛﾘｰの食事作り、泥だらけのﾕﾆﾌｫｰﾑの洗濯からこの期間だけ解放されたので、毎晩出かけました。でも、せっかくの貴重な時間、やはり有意義に過ごそうというわけで、飯綱山ナイト登山＆頂上ｷｬﾝﾌﾟ＆始業前下山に出かけました。もちろん装備は冬山仕様。午後 7 時 45 分一の鳥居発。ヘッドライトの灯りを頼りに、暗闇と静けさの中、下を見ながら登ります。長野市内の夜景も素晴らしい。午後１０時。9 合目ピーク着。雪が降り始め本格的な雪となりました。ここにある避難所兼祠に入り、ラーメンやスープなどの小宴会を経て就寝。午前 2 時に満点の星と夜景を眺めて眠り、朝を迎えると、今度は 3 ㎝近くも積もる吹雪模様の天気。足元に気を付けてゆっくり下山して、一の鳥居 8 時。大地へ戻り、何事もなかったようにﾏｰｹｯﾄのリリアン棒を作り、いつものように 1 日がスタートしました。このナイト登山。言葉では言い尽くせないほどの感動です。4 日後に、再び行ってしまいました。雄飛のシュラフの性能は素晴らしく、さすが-３０度のマッキンリーでも全く寒さを感じさせなかった代物を借りたので、頂上で星を見ながらﾏｯﾄの上で野宿しても暖かく快適でした。2 回目は雪が降り積もる中でしたが、朝までぐっすりでした。標高 1900 メートルで過ごせたのですから、今度はもっと標高の高い所か、又は、厳冬期に挑戦したくなりました。未知の世界へ足を踏み込む、挑戦するっていつの時でもワクワクしますね。

こんな風に一見危険な事を貪欲にやっていると、よく親切心から「危ないから気を付けてね」とか「自分のできる範囲でやりましょう」「無理のない範囲でやったほうがいいよ」「無理しないでそこそこにね」という言葉を掛けられます。

ひねくれ者ですから、「危険なことは百も承知、たぶんこちらの方が百戦錬磨だから対処方法は吟味して挑戦するから大丈夫」「自分のできる範囲でやっていたら、前回より高い山へ登れないし、成長がなく停滞のみ」「無理と無謀は違うし、自分に限界を決めてしまうのは惜しい、そこから挑戦して、より高みに達成した瞬間に、自分の成長を確信する感動がある」と自分に言い聞かせて、出かけていきます。

子どもたちと暮らす時は、「できる範囲でやればいい」とか「無理しないでね」なんて言葉は、私はほとんど使いません。縦割り保育で大きな子供達や大人に憧れて生活している子どもたちは、できる範囲や無理なんての概念はないし、むしろ挑戦したくて、背伸びしたくて、無理したくてしょうがないのです。それが憧れからくる成長発達の原動力となるからです。

例えば、薪運び。「持てるだけでいい」なんて言うと、枝みたいなのを持って、ぺちゃぺちゃしゃべりながら暇つぶしのように運んでいるだけ。必死さも緊張感もないし、薪もいっこうに増えない。その子どもの持てそうな基準を判断して、その 2 割増しのものを持たせると、盛り上がるんですね。そして、回を重ねるごとに、更に増やしていくと、もう子どもは自信と誇りに満ち溢れるのです。

山登りもそう。飯綱山 1917 ﾒｰﾄﾙが自分の無理のない範囲の山、登れる範囲の山と決めつけていたら、いつまでたっても 2000 メートルオーバーの世界を見ることができない。ここには、自分への感動も成長も確信しにくいのではないでしょうか。

だから、私は、意地悪ですが、子どもたちには、その子の現在のクリアレベルから 2 割増しの課題をいつも与えよう、そんな世界に連れて行くように心がけています。その時には、メルヘンとファンタジーの言葉がけを手段として使い、その気にさせます。子どもたちは、大人レベルを真似して、大人のようになっていく自分を認めてほしい欲求が、特に幼児にはあるのです。大地の子どもたちには、間違いなく確実にあります。きっとそれは、周囲の大人、保護者、教師たちが、前向きのエネルギーがあるからでしょう。**「子どもの輝く人生は、大人の輝く人生から」**です。

「できる範囲でやろう」は親切心、老婆心からですが、もしかすると、誰もが「できる範囲以上なことをしてみたい「昨日の自分よりも更にできることをしてみたい」「新しい事に挑戦したい」という欲求を持ち得ているのではないでしょうか。できる範囲のことをして、それができた時と、できる範囲と考えていた（自分で限界を敷いていた）以上の事が出来た時の違いはどうでしょう。この範囲を越えたこの差に、感動と喜びが伴うのではないでしょうか。

「できる範囲は嫌なんです！！　無理したいんです！！どこまでできるか新しい自分に挑戦したいのです！！
少しでも高い山へのぼりたいのです！！」これが成長期の人間、若さの秘訣、未来に生きる子どものキーポイントだと考えます。そんな感動を味わって欲しい、現状に満足して老けないで欲しい、子どもと同じく未来を輝かしい眼で見つめていって欲しい、そんな願いがあるからこそ（これは私の一方的な押し付けです！？）、私は「できる範囲でやろう」「無理のない範囲でやろう」という言葉は、自分にも他人にも子どもたちにもできるだけ言わないようにしています。

自分で自分の限界や自分の範疇・枠を決めない。他人にも、その人の可能性に見切りをつけたり限界や枠を勝手に決めつけたりしたくない。そんな思いがいつもあります。

だから**、私へのこれから超えるハードルは、現状よりも２０ﾊﾟｰｾﾝﾄ高くしてください、燃えますから！！**
大切な可能性のある友人や子どもたちにも、ハードルはわからないように、２０ﾊﾟｰｾﾝﾄ高くします！！